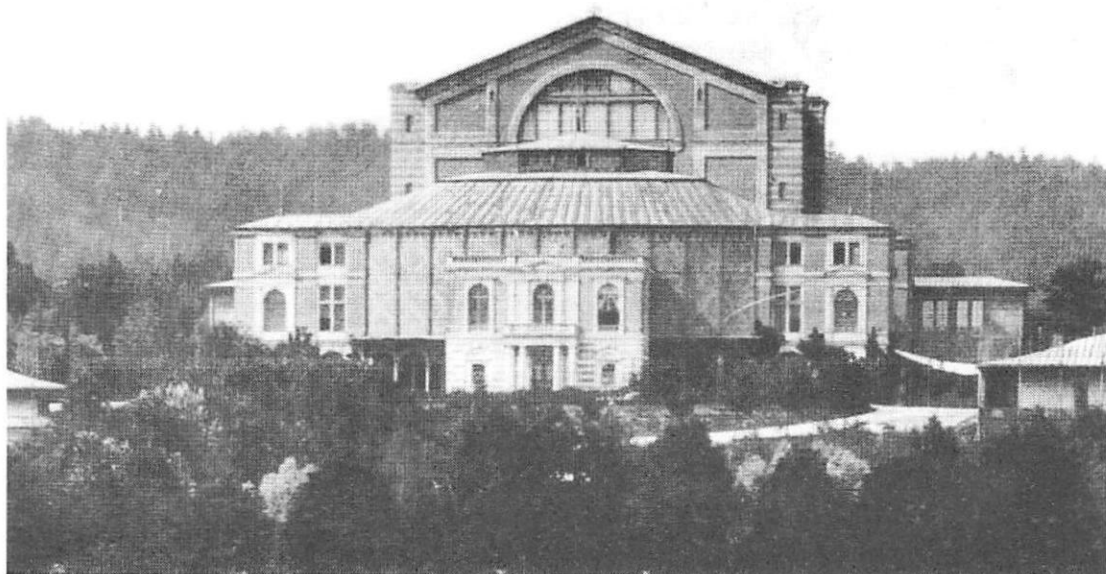


香川日独協会会報

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

KAGAWA



第13号

Oktober 2006

目 次

Baden-Baden にて— Brahms と Clara —	中村敏子	3
ボン郊外でスケッチを	内田レイ子 松島明子	7
廃墟での結婚式	中島由美子	10
ドイツ年の一年	大坂靖彦	14
ヨーロッパ旅行手記	是本誠志 大塚喜宣	16
第6回全国ドイツ語スピーチコンテスト	ビッグ・エス	18
平成 16 年度香川日独協会事業報告		20
平成 17 年度香川日独協会事業報告		22

Baden-Baden にて —Brahms と Clara—

中村敏子

黒い森を背にした街 Baden-Baden は朝もやの中で静まりかえっている。オース河の流れに沿ったりヒテントールアレーは早朝の散歩を楽しむ老夫婦の姿がゆっくりと動いているだけで、対岸のホテル街はしじまの中にあり、屋上の国旗が霧を静かにゆるがしていた。5月の森は緑万感であった。

散歩道の中ほどパビヨンのあたりに、晩年の威厳を持った Brahms の胸像と凛とした Clara のそれとが微妙な間隔で立っている。この地で2人の間柄は周知のことであるが、訪れる人は興味をそそられ、とりこになった私もその1人の旅人である。互いに才能を認め合い優れた作品を残した作曲家 Johannes Brahms とピアニスト Clara Schumann。この街での足跡をたどってみよう。



保養地として王侯貴族の憩いの地であった街だけに、狭いながらしゃれた専門店や音楽ホール、スパ、娯楽施設が整い、バス通りが街の中心を便利に走っている。小さい丘をこえると陽当たりのよい葡萄畑が傾斜地一面に広がり、それを縫って走るとお城や修道院が点在する、そんな広がりを持つ街も Baden-Baden である。

1853年、若き Brahms は Düsseldorf の作曲家 Robert Schumann 宅をたずね自作の曲を演奏し Schumann と妻 Clara にその非凡な才能を認められ作曲家としてデビュー

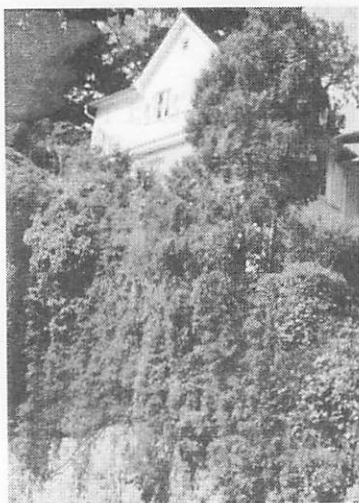
した。曲の完成のたびに夫妻のもとを訪ね、その評価を高めていった。翌年 Schumann が Rhein 川に投身自殺をはかり入院する。その間、生計をたてるため演奏旅行にでる Clara を助けて7人の子供の世話をしながら 20 歳の Brahms が留守を守った。彼が Clara 34 歳の美貌とピアニストとしての才能に惹かれたのは自然の成り行きであろう。そして2年後 Schumann は Bonn で没したが2人の結婚はなかった。

夫亡きあと Clara が普段は親類の家にはばらばらにあずけられていた7人の子供たちと一緒に過ごす団欒の場が Baden-Baden で借りた「夏の家」であった。バス通りに面した大きい建物が「Clara Schumann の夏の家」で非公開ながら持ち主がかわっても保存され、金属の表板が戸口にあがっている。すぐ前のバス停は「Brahms-Platz」とある。近くのレストラン「Goldener Löwe」は Brahms が通いつめ演奏もした店で常連席 Stammtisch が今に残る古い店である。



Brahms がここから 10 分ほどのところにお気に入りの部屋を借り、ここで多くの名曲を生み出しているのは Clara の存在におうところが大きい。緑の散歩道はずれ、バス通りを少し奥に上ると修道院があり、その前の広場には bio の出店が日曜日ごとにたつ。僅かな店数だが殆どが顔なじみの客で四方山話があちこちではじまる。このようなひなびたあたりを過ぎバス通りを回っていくと、小高い丘の上に白い Brahmshaus が見えてくる。すそのあたりに小さい電気屋があるだけでなにかまえた表記などはなく、薦のからまった石碑に「Wohnung von Johannes Brahms」とある。狭い石段を登り1階の貸家を右手にすぎ、さらにのぼると小さな入口にでる。こじんまりとした木造家で重い木戸は大きな音でしまった。ペンキ塗りの狭いまわり階段にそって登ると受付につ

く。中年の女性が日本人かと声をかけ、有料の日本語パンフを差し出した。



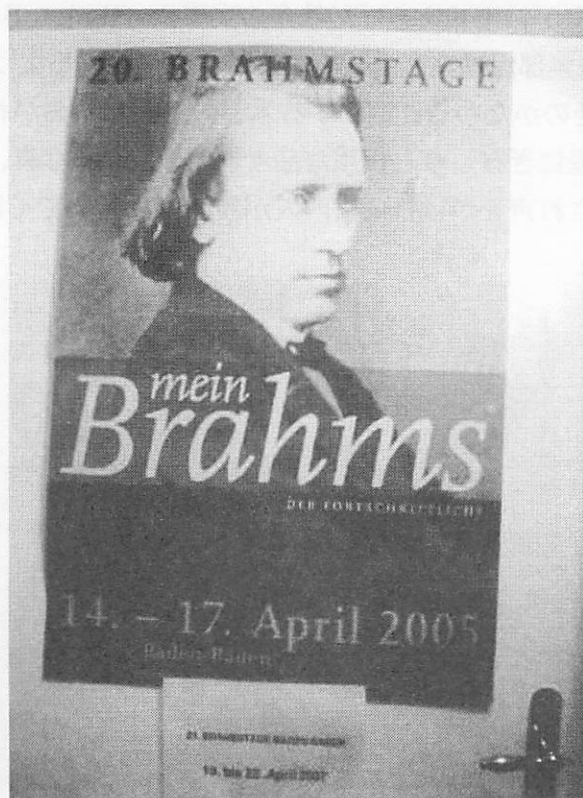
天井が低く床のきしむこの2部屋が当時の彼の借住まいで建物の3階にあたる。昔と同じデザインの青と黄を基調にした鮮やかな壁紙、ワイン色の肘掛け椅子が昔のままにありこの部屋は「青いサロン」とよばれた。小さな窓からは Brahms が秘かに愛したという Clara の長女が結婚式をあげた教会の尖塔や、Baden-Baden の街なみが一望できた。その隣の屋根裏部屋は寝室として落ち着きやすらげるように屋根の傾斜にそってベッドがおかれ、そのかたわらに開閉する木製の洗面台がおかれている。彼が過ごした2部屋の隣の小部屋にぎっしりと貴重な品々自筆の原稿、写真、デスマスク、小物類が年表とともに展示され声をかければ案内人が親切に説明してくれる。



Brahms は Clara 宅の近くにあるこの屋根裏の 2 部屋を借り 1865 年から 74 年までの約 10 年間、毎年夏をすごした。彼自身が「丘の上にある美しい家」と称賛したこの家で優れた作品を生み出し、その都度 Clara に評をあおいだという。

受付で手渡された資料によると、この家屋がはじめて公式に記録されたのは 1836 年となっており、その後改築されたものの当時の姿を今に保っている。この建物の所有者の変遷で、取り壊しの危機もあったが、「Brahms が滞在し作曲していた家」としてドイツ国内外からの反対運動が起こり、文化財保護下におかれ、ドイツ唯一の Johannes Brahms の住まいとして築後 170 年を経ている。その後「ブラームス協会バーデン・バーデン」がこの建物を買取り修復し、1968 年 6 月 16 日以来一般公開されるようになった。またこの協会が創立（1966 年）以来毎年主催していた「Brahms Tag」は国際的に有名な演奏家たちによって盛り上がりを見せ、現在は隔年毎の春に開催されている。

確かな絆でむすばれた 2 人の偉大な音楽家は、この地にとってかけがえのない遺産を残した。今もその多大な業績とゆるぎない深い愛に畏敬を持っておとずれる人を魅了してやまない彼らが過ごした街 Baden-Baden はもう黄金の秋を迎えているであろう。



ボン郊外でスケッチを

内田レイ子

松島 明子

3年前に始まったドイツ行きの話は、途中いろいろな事があり、やっと今年の6月に実現することが出来ました。ドイツへはホームステイ形式ではなく、ホテルに泊まってボン独日協会の皆様にお世話になると言う「ビジット」という方法にさせていただきました。そして、不安と期待を胸にいっぱい抱きながら、6月6日関西空港から旅立ちました。

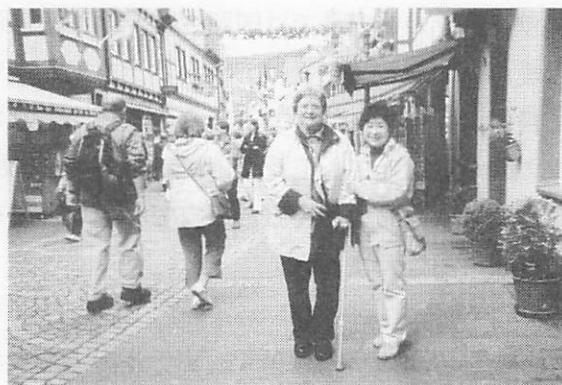
フランクフルト空港では国岡さん、ボン駅には Mrs. Kobayashi、ホテルにはメンビさん、と皆様の暖かいお出迎えを受けて無事ホテルに到着することが出来ました。が、ここでびっくり、夜遅く目的のホテルに着いてみたらここは小さなホテル、フロントは何処にもない、外は真っ暗、電車の駅からはとても遠そう、ホテルは静まり返って私たち以外は誰も泊まっている様子はない、これからの一週間を考えると不安で心配な一夜を過ごしました。木々のざわざわという音だけが、窓の外から聞こえました。

思い直して次の日の朝早く、ホテルの近くを歩いてみました。すると、どうでしょう、昨夜あんなに怖いと思ったホテルがとても可愛いのです。郊外でしたが、近くにはパン屋さんやマーケットもレストランもあり、その上静かでとても環境が好いところだと分かり嬉しくなりました。それからの一週間、本当に快適に夢のような日々を過ごすことが出来ました。これも、このホテルを探してくださったメンビさんのお蔭だと心から感謝いたしております。



一週間という短い滞在でしたが、6月の花々が咲き誇り、独日協会のご親切な歓迎を受け、ボン周辺の小さな町はそれは素晴らしく、観光地と違ってアットホームな所ばかり。伝統家屋が美しいのどかな田園風景が広がり、また、ドイツの人々の環境問題に対する取り組み方の真摯な思い、などに触れ本当に感動を受けた日々でした。

ボン独日協会の皆様のご親切は忘れることが出来ません。Kobayashi さんご夫妻には駅まで送迎していただき、Gisela さんにはお宅にご招待していただき、Hanna さんにはボン市内を、Joachim さんにはケルン市内を、Roeder さんには Bad Münstereifel を案内していただきました。Yoko Schmidt さんはおいしい日本食を作って届けてくださいました。



特にメンヒさんには心からのおもてなしを受け、連日スケッチの出来る場所へ連れて行って頂いたり、近くのレストランへ連れて行っていただいたり、初めてのボンでの生活が困らないよう沢山のご配慮をしてくださいました。本当にありがとうございます御座いました、丁度、ホワイトアスパラガスのシーズンだったので、このおいしい地域の味を堪能する機会にも恵まれた幸せな旅でした。これもひとえに高木先生をはじめ会長の中村さんのお蔭だと感謝いたしております。いろいろご配慮いただき本当にありがとうございます御座いました。厚くお礼申し上げます。





廃墟での結婚式 2004年8月7日

中島 由美子

(結婚式の主役、カティヤの紹介 2002年に香大に留学中、デーゲン先生の授業を受けていた私たちに、放課後ボランティアでドイツ語会話の先生をしてくれた可愛く、賢く、その上とてもしっかりした女の子)

朝目覚めると雨が降っていた。それも土砂降り。水曜日(2004年8月4日)にドイツに着いてから毎日爽やかないい天気(ドイツ人は皆、暑い暑いといていたが)だったのに結婚式当日(8月7日)が土砂降りであった。結婚式はどうなるの、廃墟での結婚式ってどんなの・・・そもそも廃墟で結婚式というのが想像できない。ホテルの部屋でいろいろ考えながらごろごろしていた。あんなに激しく降っていた雨も10時頃になると少しずつ雨足が弱くなりお昼前には上がった。奇跡!! 2時からの式でホテルを1時出発。丘の上にたつホテル(ペンション?)周辺は、見渡す限り森とそれを切り開いて作ったらしい放牧場しかなく、カランコロンという牛の首についた鈴の音が部屋まで聞こえていた。雨の日にその牛たちはどこにいるのかしら。とにかく交通手段は何も無くタクシーさえ1度も見たことが無い。私は同じホテルに泊まっていたカティヤのおばさん夫妻の車(彼らは旧東ドイツから来ていた)に乗せてもらって式場までいくことになっていた。式が終わればすぐ食事だから(日本の結婚式しか知らない私の発想)と昼食ぬきで予定通り1時出発。

車は山に入っていくと程なく到着。建物らしきものは無いが皆が歩いていく方向に私も歩いた。人がたくさん集まって、久々にあった挨拶やら近況報告などしている風(何しろドイツ語が聞き取れないので)であり、この情景は日本も同じだわ、と思った。よく見るとその先に「廃墟」があった。石が積まれた壁は1階部分しかなく、多分平屋の小さな小さな教会だったであろうと思われる。その廃墟の中に背もたれも無い巾の狭いベンチがたくさん並べられていた。そこにはなんと日が差していた。これから始まる素晴らしい結婚式を十分に予感させた。狭い空間にびっしりベンチが並べられていたので一度座ると式が終わるまで身動きが取れない状態だった。

後ろから音楽が流れてきた。数人の楽隊が奏でる生演奏の中、新郎新婦が入場。

ウェディングドレスを着たカティヤは本当に美しく、気高くまさに「花嫁」であった。

式自体は厳かにしかし皆わりとりリラックスして1時間足らずで終わった。

新郎新婦が廃墟前の広場に並んでたち、一列に並んだ参列者とそれぞれお礼の言葉をかわし抱擁し、挨拶が済んだものから車でガーデンパーティーの会場に向かった。

ガーデンパーティーの会場はヨーク(新郎)の家の裏庭である。私がドイツに到着したその日はもう庭師とお手伝いさんのような女性とで黙々と庭の手入れをしていた。とにかく広い庭で、結婚式前日、その一角に私の家のより大きいと思われるテントが張られた。ヨーク

の家族や、カティヤの家族、プロの人たちとで張られた。テントや庭の飾りつけも結婚式を請け負ったと思われる人たちと相談しながらみんなでした。時には新郎側と新婦側で意見が合わない事もあった。よく観察していると、言葉で強く言い争う場面は無かったがなんとなくヨークの母親の意見が通るようであった。しかし若いカティヤはその結果に大いに不満であったようだ。その場では何も言わなかったが、夕方、当分作業が進みそうにも無い（意見がまとまらず）ので、私を車でホテルに送ってくれた。その途中、「何でいつもウリ（ヨークの母親）が正しいの？」と叫んでいた。とても物静かなカティヤが大声で怒っているのを始めてみた。誰もその場で心に思っていることを全部口に出すことは出来無いのだなあ、日本人と同じだなあ、と感じた。しかし表面では何事も無かったように進行していくのである。それでも全体的にはお互いの家族が協力し合って2人の結婚式を素晴らしいものにしてあげたいという気持ちが伝わって来た。そして私もその準備を手伝うことが出来、これはとても楽しかった。結婚式の体験と同じくらい印象深く、素晴らしい思い出となった。



廃墟での結婚式。写っている石の壁だけが残っていて、屋根らしきものは何一つない。

廃墟での結婚式が終わった人々がこの綺麗に飾りつけられた庭に集まってきた。テントの中も外もたくさんテーブルやいすが置かれ、皆思い思いに好きな所に座る。私はとにかくお祝いをいつ渡せばいいのか気になった。皆も小さな箱だったり、風船をつけた封筒だったり、プレゼントと思われるものを持っていた。周りにいる若い人たち何人かにいつ渡すの、と聞いたが皆わからないと言う。ドイツ人が分らなくて私はどうすればいいの。このお祝いも、何を、いくらぐらいの物をすればいいのか分らず悩みの種であった。デーゲン先生からお金を送るのはオシャレじゃない、と言われた事が有ったので。送られてきた案内状には、二人はすでに生活に必要なものは全て揃っているの、新婚旅行先のオーストリアで、パラグライダー教室に通うその授業料の足しにするのでお金を寄付して

下さい、と有った。だが、お金以外にも少しプレゼントを用意したかったのである。日本を出発する少し前、どうしてもいいプレゼントが思い浮かばないので、メールでカティヤに率直に聞いてみた。カティヤは案内状にあったのと同じ答をしてきたので、私も色々考えるのを止めてお金だけにする事にした。

日本の可愛い熨斗袋に入れたお祝いを持って、どうしよう、どうしたらいいの・・・と考えていると皆がケーキと飲み物をもってテーブルの方にやってきた。「ケーキをどうぞ」と言う案内が有ったのかも知れないが、何しろ会場になっている庭が広いのでテントで座っていた私には何もわからなかった。参列者がこちらに移ってきたのは4時前だったと思う。今頃ケーキなんか食べたらせっかくのディナーが入らないんじゃないの？と心配してしまった。ケーキをお皿に山盛りの人もいた。このたくさんのケーキも前日カティヤのお母さんやヨークの家のお手伝いさんで作ったものだそうだ。庭の中に小さな丸太で出来た東屋が2、3あった。そのうちの1つがケーキコーナー、もう1つがドリンクコーナーとなっていた。あまりにも大勢の人なので飲み物はこれも前日トラックでひかれてきた荷台が全部冷蔵庫になったものが2つ庭に置かれていた。カティヤの友達カップルが話し掛けてくれ、私の前に座っていたので、その女の子にカティヤのおかあさんが作ったケーキだと説明して、一口だけ味見させてもらった。素朴でとてもおいしかった。



庭で丸太を二人で切っているところ

ざわめきで振り向くと新郎新婦が庭に入ってきていた。拍手が起こった。花嫁の後ろには赤いおそろいのドレスをきた2人の可愛い女の子が（といっても16、7歳くらい）ウエディングドレスのすそを持っていた。私の居たテントは庭の入り口にあったので、新郎新婦は庭の中央に進んだ。私も回りの人たちもそちらへと移った。庭の中央で二人はいすに座りカティヤのお父さんが来客に挨拶した。まず2人の前に丸太が置かれそれを2人が鋸でひいた。丸太が2つに切れると拍手喝采。今からこのように2人で力を合わせて頑張ってください、ということでしょう。小さな子ども達もたくさんいたので、子ども達が参加できる風船飛ばしなどもあった。カティヤのお父さんがギターを弾きながらカティヤの子

ども時代のからの思い出を歌った。傍らでおかあさんが楽譜をもっていっしょにハミングしていた。旧東ドイツからきていた、カティヤのおじいさんは「詩」を朗読した。残念ながらこれも意味が分らなかった。いろんな出し物があり大いに庭で楽しんだが、ぽつぽつ雨が降り出したので皆でテントに移った。6時頃ではなかったかと思う。テントは超満員になった。その中でもゲームや話が繰り広げられ、8時頃にやっと食事の準備が出来たのでどうぞ、と案内が有った。お腹がすいていたけどこの人たち皆が並ぶのである。いつ食事ができることやら・・・・・・、1時間程、列を眺めていたが、私も並ぶ事にした。雨が降り続いていた。誰も雨を気にしている風ではなかった。廃墟での式から、庭に移って来たときにはもうすでに4、5人のコックさんが料理を作っていた。先にメニューが配られていたので、お米の料理が有るのを見つけていた。久々にお米を食べたい、と思いたくさん取ってしまった。大皿にステーキ、ハム、サラダ、ご飯？など、お代わりをしなくてもいいようにたくさんのせて席に戻った。が、お米料理はまずかった。他の物は全て美味しかったのに。食べると皆は益々元気になったようで、踊り歌い、パーティーを本当に楽しんでいた。新郎新婦も歌い踊るのである。パーティーの途中、皆が手に手にプレゼントを持って新郎新婦の前に進み、お祝いを言ってそれを渡していたので、私も大慌てで持っていった。やれやれである。一番大切？な仕事を終えた感じがした。

若いカップルが、朝までパーティーは終わらないかもしれないので一緒に帰りませんか、と誘ってくれた。喜んで同乗させてもらい11時過ぎにホテルに戻った。やはり明け方までパーティーは続いたそうだ。翌朝10時頃パーティー会場に戻るとまた、皆で片付けをしていた。私も手伝った。片付けも、なんか、家族の一員みたいでとても楽しかった。

豪華なパーティーだけど自分達でできることは自分達です、メニューや楽譜などの印刷物、ケーキや、食後のデザート、テントの飾り付けに使う小物類など、忙しい日々の中で2人の幸せを願って皆で作ったパーティーだということを強く感じる事ができた。

長くなりすぎるので両家の人々のやさしい心遣いについて書けなかったが、皆とても親切で暖かく受け入れてくれた。生涯の楽しい思い出の1ページとなりました。



テントの中

●ドイツ年の一年

株式会社ビッグ・エス

代表取締役 大坂 靖彦

ドイツ年の6月21日、社員数名とドイツへ行ってきました。今回の渡独の目的は、株式会社ビッグ・エスがフイランソロフィー（社会貢献活動）の一環として行っているフリーデンスドルフ国際平和村への100万円の募金の贈呈と、ラインシュタイン会80周年記念大会への出席でした。

フリーデンスドルフ国際平和村への募金活動は今年で4回目。ケーズデンキに訪れるお客さまのご支援と社員たちの募金活動によるものです。フリーデンスドルフ国際平和村は世界各地で勃発している紛争に巻き込まれて傷ついた子供たちの手術や治療、リハビリなどを行っているボランティア運動です。この運動に私共は、香川の一民間企業ではありますが少しでも支援できないかと始めた活動です。フリーデンスドルフ国際平和村は多くの人に支えられていますが、一民間企業が毎年継続して支援活動を行っているのは稀なケースだと聞いております。私もこの施設を訪問するたびに、傷ついた子供たちが元気になる様子に接し、喜びも一塩ですが、一人でも多くの子供たちが救われることを願うと共に、明日をになう子供たちがこのような紛争に巻きこまれない平和な社会になることの決意を新たにします。

ラインシュタイン会80周年記念大会は、かの有名な名城、ライン河畔に聳えるラインシュタイン城で行われました。ラインシュタイン会というのは今から80年前の1925年に設立され、日本では42年ほど前に上智大学とケルン大学を中心に学士会、エドライン会東京として結成されました。日本国内には130人余り、海外での会員数500名余りという大組織に発展しています。今回の大会には学生時代の絆で深く結ばれ、その後世界で活躍している100名が集まりました。中にはドイツ人の宇宙飛行士もいました。この記念大会の前日には大学生の町ミュンスターで日本ゲルマニア協会25周年記念行事に招待され、参加して参りました。この両団体の幹部のひとり、カールハインツマイト氏は私の学生時代の学生寮での同室者で、卒業後、ドイツと日本でそれぞれの道を歩みながら、彼はケルンで、私は香川でお互いに日独親善の会を設立しました。

帰国後ドイツ大使館でのバイエルン・ミュンヘンサッカーチームとの交流もでき、あの有名なドイツの守護神、ゴールキーパーのカーンさんとのツーショットなど忘れがたいひと時を過ごしました。

また、その後独協学園高校の第7回ドイツ語スピーチコンテストに招待されました。株式会社ビッグ・エスが毎年行っているドイツ語スピーチコンテストのご縁で招待されたものです。ドイツ年ということもありコンテストは大盛況で、内容の充実したものでした。参加員数はプレコンテストに勝ち抜いた33名。ご父兄の参加が多いのには驚きました。しかも、ドイツ語のレベルは高く、ドイツ語でのコント、ドイツ語劇などを流暢なドイツ

語を駆使し、その素晴らしさに感心し、楽しませてもらいました。また、運営方法も見事でした。例えば、コンテストの審査時間の待ち時間を利用して、ドイツで活躍中のご夫妻によるピアノ演奏と独唱がありました。これには圧倒されました。この会場には株式会社ビッグ・エスのスピーチコンテストのポスターが随所に貼られていました。休憩時間を利用して、パンフレットを皆さんに配布させていただき、株式会社ビッグ・エスのスピーチコンテストのPRをさせていただきました。今、日本でドイツ語授業のある高校は100校近くあるようですが、このような催しを通して、ドイツ語人口が少しでも増えることを願っています。

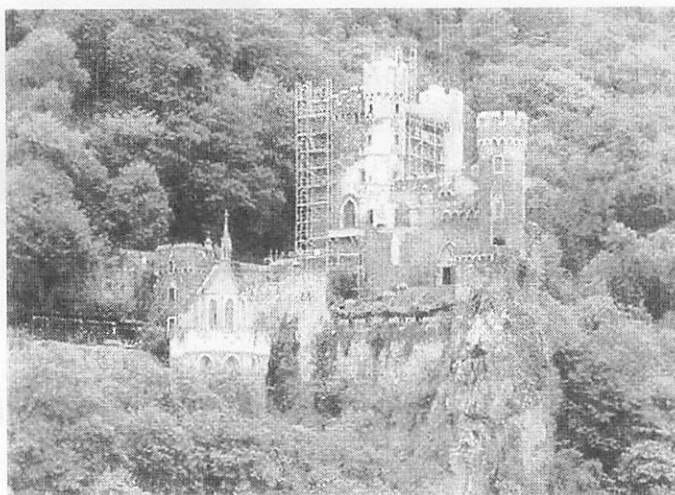
この日の夜は四谷の上智大学で学士会 エドライン会が催され、ドイツでの記念大会参加者の帰朝報告で盛り上がりました。

2005 年年末から正月にかけて再び、ドイツ、スイスを訪問し真冬の素晴らしさを満喫してまいりました。また、6 月にはサッカーワールドカップのオーストラリア戦を観戦。会場のカイザースラウテルンは当社が輸入販売しているワイナリーが近くにあり、今年のワインの状況の確認や買い付けを行ってきました。ワールドカップ第一戦はどうしても観たくて、インターネットで半年も前から申し込んでいたのですが、残念ながらチケットを入手することができずにあきらめていたところだったのですが、幸運にも女神が微笑んでくれたのか、ドイツの電気メーカーからご招待を受け、運よく夫婦で観戦することができました。

その後は、ルフトハンザドイツ航空の招待でバイエルンサッカーチームと二回目の対面を果たし、また、同大使館で催された「日本にいる恵まれないドイツ人を救う会」に参画させていただきました。

そして先日東京にて「ドイツワインの夕べ」を主催し、ルーマニアの大蔵大臣の飛び入り参加もあってドイツ、そしてワインで大いに盛り上がりました。

ドイツ年は、私の人生のなかでも、まさにドイツ年で、ドイツにどっぷりと浸った一年でした。これからも、日独の文化やコミュニケーションの交流のために少しでもお役に立てればと思っています。



【ラインシュタイン城】

エドライン会の母体であるドイツ・ケルン市のラインシュタイン会はこのライン河畔に聳える古城をその精神的象徴として1925年に設立された。エドライン会の会歌「歌えば想いはラインのほとり、伝統を秘めたる古城に立ちて、誓いし我が友情、エドレナニア」にある古城はラインシュタイン城のことです。

期間：2005年6月15日～6月24日

株式会社 **ビッグ・エス**

営業部長

ケーズデンキ垂水本店 店長

是本 誠志

大塚 喜宣

今回のヨーロッパ旅行はドイツ語圏の三カ国(オーストリア、スイス、ドイツ)を是本・大塚の2名で制覇するという非常に期待と不安が交錯する旅の企画でスタートしました。

初日はオーストリアのウィーンに到着。ベンツを走らせていざホテルへチェックイン。(EUのタクシーの大半はベンツのワゴン車なのです。) 初日から荷物を置いてすぐに観光モードに切り替えるとまずは世界三大オペラ座のひとつと言われるウィーンの国立オペラ座へ直行しました。オペラ座は公演中で入口の扉を開けようとした瞬間に警備員に入るなど注意されたので、とりあえず訪れた記念に建物をバックに写真撮影を実施しました。その後、地元料理で腹を満たし到着初日は更けていきました。といってもヨーロッパは夜10時ぐらいまで明るくいのにレストランやパブ以外の店はほとんどが夜6時ぐらいまでの営業という事もあるって初日からカルチャーショックをうけながらホテルで就寝しました。

2日目にはホイリゲという居酒屋の集合地、シェーンブルン宮殿、ナッシュマルクトという食料品の市場、マリアテレジア広場、国立美術史博物館、シュテファン寺院を一気に制覇した後、昨日購入した(掴まされた)コンサート会場である宮殿へと地下鉄や列車で乗り込みました。今回の二人旅は簡単にタクシーを使わずに公共交通機関を利用する事も目標のひとつだったのでコツコツ乗り換えを実施したのも後で振り返ればいい経験になりました。宮殿のオーケストラコンサート会場は意外に満員(1500席程度)で、コンサートの内容も笑いあり、優雅さあり、感動ありの本格的な内容で言葉は分からずとも退屈させない内容でした。ホテル近くのパブで読めないメニューから注文するとびっくりする様な味のびっくりする様な量の遅い食事をしホテルに戻ったのはもう24時近くでした。早くも明日はスイスへ移動です。



3日目はスイスのチューリヒへと飛行機で移動しました。ホテルにチェックインしたのが13時ごろでしたので、急いで身支度をして楽しみにしていた「ラインの滝」へと向かいました。スイスでも電車を乗り継ぎ到着したラインの滝はいままで見たこともない雄大な自然が待ちました。船で滝つぼの間近まで迫り、水しぶきのおりなす迫力のあるサラウンドを耳にしながら水滴の洗礼も浴び、決死の思いで実況中継のビデオ撮影も試みました。

4日目は朝早く起床してアルプス山脈の一角であるシルトホルン展望台(標高2973m)映画007「女王陛下の007」のロケ地で有名な回転レストランへ行きました。そこには見たこともないスケールの大きいアルプスの大自然がパノラマで広がっていました。山と雲と雪とがおりなす地球の神秘がそこにはあり、それが自分の肉眼で見たことの幸せを改めて感じる事ができたのでした。



5日目には、ドイツ入りし、ついに弊社のオリジナルワインの故郷の農家の家族との対面です。ドイツフランクフルト空港にはペーターバルツホイザーさんとペーターフーフさんが迎えに来てくれていました。是本は6年ぶりの再会、大塚は初対面となりました。田舎のドイツ語はいままでの観光地でのドイツ語とは違い早口で方言らしい語尾の違いがあり、非常に聞き取りにくく、ドイツ語担当の是本はプレッシャーが掛かりました。

空港からマインツ郊外のワイン農家の一軒の中庭で歓迎パーティを開いてもらって遅い昼食となりました。パーティでは素晴らしい地元料理に舌鼓を打ちながら、お腹を満たすことができました。実はここでビッグなサプライズがあったのです。それはサッカーのFIFAコンフェデレーションズカップが今年はドイツで開催されていてフランクフルト空港近くにこの日から10日前に完成したスタジアムで「日本対ギリシャ」が開催されるということです。実は大塚社長の計らいで急遽夜行われるパーティ

を昼に変更してサッカー観戦をプレゼントしていただいたのです。

当日券を購入して、入場した真新しいスタジアムの中は8割がギリシャのサポーターでしたが、負けずに、日本を応援しそれに答えるかのように日本代表FWの大黒が得点して1対0で日本が勝ったのです。一緒に観戦したワイン農家のみんなも日本を応援してくれたことで、そこには短時間で一体感が生まれたことが最高の財産となりました。

6日目にはワイン農家の方達の仕事場であるワイン畑とワインケラーを見せていただき、1本1本のワインの出来上がる過程、その仕事に対する情熱を感じ、日本へ帰国した際は少しでもワイン農家の人々の気持ちがこもったワインをお客様に伝えることが自分の使命であり責任だと感じました。



7日目には今回の旅の最大の目的であるドイツ・オーバーハウゼンの国際平和村を訪れました。弊社で続けている毎年100万円の募金も今回で4回目になり現地スタッフも歓迎ムードであったのですが、そこで我々が目にした光景はあまりにも平和な日本とはかけ離れた光景でした。幼いのに怪我をして車椅子にのった子供、顔に火傷を受けた子供、地雷で片足をなくした子供たちだったのです。この平和村は世界各国からの募金や寄付とボランティアの方々の方々の力で成り立っているとのことでした。私達の子会社の取り組みが一助になっている事を実感し、続けられるだけ続けたい、続けなければならないと心の底から想いが湧き上がってきました。



何も悪くない大人達の都合で負傷した子供たちにとっての厳しく悲しい現実をこの目で見た事は非常に大きな意味があると思いました。ただ平和村の子供達は環境も施設も寄付によって年々が良くなっており、非常に明るい表情だったのがひとつ安心出来る事でした。

私達は、日本に帰国してこの平和村の事をビッグ・エスのスタッフに正確に伝え思いを同じにしてこのフィランソロピー活動の実績と今後の継続に更に気持ちを込めたいと感じました。



旅行気分だった私たちには、何事にも変えられない財産を貰った気持ちになり思わず目頭が熱くなり、彼らと別れるときは、自分達に出来る事をしっかりと進めようと改めて決心しました。

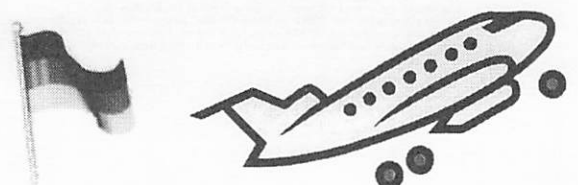
7日目にはケルンで宿泊となりました。ケルンの駅前には大迫力の大聖堂(ドーム)があり、螺旋階段を利用して天辺に登れるとの事だったので息を切らしながら上りました。狭い階段を20分近く上ったところで、高所恐怖症の大塚は逃げ腰になり後退しかかりましたが、なんとか登頂成功し素晴らしい景色を見ることができました。

あっという間の8日間ヨーロッパの旅で、様々な貴重な経験を堪能した私たちは帰りの飛行機の中で、まだまだ色んな世界を見てみたいという欲求にかられ、また帰ったら頑張って仕事をして代表で平和村の募金贈呈式に来られる活躍をしようと誓うのでした。

そして次回来たときにはもっと成長した私達を、ワイン農家の人達にも、国際平和村の子供達にも見せられるように自己研鑽しなければいけないと気持ちを律しました。

最後に、夢のような世界を見せてくれたビッグ・エスという会社に感謝するとともに、不在の間歯を食いしばって店舗や会社を堅守してくれていた仲間たちにお礼を言いたいと思います。

本当にありがとうございました。



第6回 ビッグ・E 全国ドイツ語スピーチコンテスト 結果

開催日時：2005年11月12日(土) 13:00～16:00

開催場所：高松市生涯学習センター(一般公開、入場無料)

■審査員

(敬称略)

審査員	紹介
エルケ・ティート Elke Tiedt (審査委員長)	大阪神戸ドイツ連邦共和国総領事館 総領事代行 Vertreterin des Generalkonsulats der BRD in Kobe-Osaka
オットー・F・ベンツ Otto.F.Benz	ルフトハンザドイツ航空会社 日本支社長 Lufthansa Aktien Gesellschaft, General Manager Japan
リタ ザクセ・トゥサーン Rita Sachse-Toussaint	大阪ドイツ文化センター 語学部長 Goethe Institut Osaka, Direktorin der Sprachabteilung
ヘルベルト・ファイド Herbert Feid	ウインクレル商会株式会社 代表取締役 Winckler Gesellschaft-Firma, Repräsentativer Direktor
ノイマン・フローリアン Neumann Florian	香川大学 講師 Kagawa Universität Dozent
植松 健 Ken Uematsu	江戸ライン会 総裁 Präsident von Edo-Rhenania
アネット ゲーブラー・植松 Annette Gäbler-Uematsu	元松戸市国際親善大使 Ehemalige Internationale Kulturbotschafterin der Stadt Matsudo
マーレン・イゲル Maren Igel	日本カールデュイスベルグ協会(研修生) Nippon Carl-Duisberg Gesellschaft e.V., Praktikantin
ペトラ・ナーゲル Petra Stephanie Nagel	香川県国際交流員 Vertreterin des Internationalen Austauschprogramms für Kagawa

■コンテスト入賞者

今回は総勢 32 名の応募があり、プレコンテストを勝ち抜いた 17 名が本選にチャレンジしました。

(敬称略)

入賞内容	入賞者	年齢	出身地	学校名・職業
最優秀賞(朗読)	森 英起 もり ひでゆき	25	香川県	—
最優秀賞(朗読)	大野 真梨 おの まり	15	埼玉県	埼玉県立羽生第一高等学校
優秀賞(創作)	奥村 京子 おくむら きょうこ	24	京都府	同志社女子大学
優秀賞(創作)	田村 慶三 たむら けいぞう	49	香川県	香川県立飯山高等学校教諭
優秀賞(創作)	中島 孝雄 なかしま たかお	35	宮崎県	旭有機材工業株式会社
熱演賞(創作)	森田 紫帆 もりた しほ	34	東京都	富士レボロ株式会社
熱演賞(創作)	神庭 美喜恵 かんだ みきえ	46	鳥取県	児童英語教師
努力賞(朗読)	佐々木 暢子 ささき みちこ	21	岩手県	龍谷大学
努力賞(創作)	棚橋 嘉代子 たなはし かよこ	68	岐阜県	主婦
ユニーク賞(朗読)	嶋村 文 しまむら ふみ	16	香川県	香川県立高松高等学校
ユニーク賞(創作)	西方 睦枝 にしがた むつえ	23	岡山県	ホテルグランヴィア岡山
チャレンジ賞(朗読)	貝森 美帆 かいもり みほ	16	神奈川県	神奈川県立外語短期大学付属高等学校
チャレンジ賞(朗読)	高橋 美帆 たかはし みほ	20	千葉県	日本大学

(惜しくも入賞を果たせなかった方にも全員に、本選出場記念のメダルが贈られました。)

平成 16 年度 香川日独協会 事業報告

平成 16 年 (2004 年)

4 月 18 日 (日) 理事会

総会提出書類の承認

平成 15 年度全国日独協会連合会総会報告 (当番協会：神戸日独協会) 3 月 15～17 日

4 月 24 日 (土) 18:30～ ピアノ・リサイタル協力 高松市美術館エントランスホール

Martin Helmchen 氏は Berlin 生まれの 22 才

5 月 30 日 17:00 平成 16 年度総会 全日空ホテル・クレメント高松 2 F

審議事項

1、平成 15 年度事業報告案、平成 15 年度会計決算報告案 承認

2、平成 16 年度事業計画案、平成 16 年度予算案 承認

報告事項 1、全国日独協会連合会総会 2、「日本におけるドイツ年」行事について

7 月 1 日 会報原稿募集依頼、初級ドイツ語講座「Glück」案内の発送

7 月 23 日 (金) 18:00 「海辺のテラスでビールを！」 レストラン「ミケイラ」にて

7 月 24 日 (土) 11:00～ 香川大学工学部インターンシップ交流会

ボンラインジグ大学から Henninng Störk が企業研修 HS 先：渡部恵子宅

8 月 27 日 (金) 13:00 「ドイツ菓子教室」開催 ヨンデンプラザ・サンポート

‘菓子工房ルーヴ’ 川村チーフパテシエによる講習会

10 月 9 日 (土) ボン日独協会姉妹提携 10 周年記念講演会と交流会

講演会：13:30～ 高松市立美術館 1 F 講堂

講師：木村敬三 元ドイツ大使 (財) 日独協会副会長

演題：「日独関係を考える」

交流会：木村敬三ご夫妻をかこむ会 16:00 リーガホテル高松 2 F レストラン

10 月 23 日 (土) B・S スピーチコンテスト後援 香川県文化会館 3 F ホール

11 月 14 日 (日) 米子日独協会との交流会 屋島「わらや」

米子日独協会のメンバー 20 人が鳴門ドイツ館の見学の帰り道に立ち寄られ屋島寺、四国村、を見学ののち「わらや」でうどん交流会をもつ

平成 17 年 (2005 年)

1 月 28 日 (金) 18:00 理事会 高松市内

2 月 19 日 (日) 「春を呼ぶ会」グランリーガにて

夏の終わりに高潮と台風の 2 度の災害が香川を襲い全県下で大きな被害があった。その後の行事を自粛して、遅い新年会になった

3 月 22 日 (火) 全国日独協会連合会年次総会 (当番協会：とちぎ日独協会) 会長出席

3 月 23 日 (水) 日独パートナー会議 ドイツ日独協会役員 90 名が来日

ボン独日協会との姉妹提携行事であるホームステイ交流について香川、ボン両協会から基調発表をする。これをもとに日・独各協会からの意見、体験談が活発にあった。変革をしながら現況に沿った交流を考えようという結論となった。

木村敬三・元ドイツ大使のご縁から

昨秋、香川日独協会ではドイツ週間の行事に木村敬三・元ドイツ大使をお招き致しました。木村ご夫妻は徳島空港へ到着後、すぐにその足で田村館長のご案内で旧収容場跡地と慰霊塔におもむきしばし感慨深く説明を聞かれ苔むしたドイツ橋にも感嘆しきりの様子でした。そして鳴門ドイツ館を訪問されたご夫妻は田村館長の丁寧な説明にうなずきながら耳を傾け別荘を持った俘虜たちの生活には驚きの声を、また彼らが発行した新聞「バラッケ」にもことのほか興味を持たれ紙面をたぐっておいででした。

長い外交官生活の中でドイツが13年という主な駐在地であられたことから「日独関係を考える」の演題で講演をお願いいたしました。本題に入る前に初めて訪れた鳴門ドイツ館の印象を熱く語り始めました。

「第一次大戦当時の四国の方々が俘虜である彼らを暖かく遇してきたことがわかり日独親善を願う者の一人として大変うれしく感じました。ドイツとの親善の宝物であり大いなる遺産であってドイツ人がくると喜ぶでしょう。私も東京へ帰ったらドイツ大使その他には是非いくように伝えましょう。」と。

そして先日、ドイツ大使館の若い一等書記官夫妻が鳴門ドイツ館を訪れました。四国旅行を申し出た彼らは迷わずここを旅の目的地としその後四国霊場を巡って帰って行きました。

(香川日独協会会長 中村敏子)



平成17年度 香川日独協会 事業報告
「日本におけるドイツ年」ドイツを知ろうシリーズ

平成17年 (2005年)

4月12日(火) 豊橋日独協会との交流会 13名参加 豊橋にて

13日(水) 愛・地球博のドイツデー行事に13名が豊橋日独協会会員と参加
ケルンのローテンフンケン(赤い火花)グループ100名が舞台上で演奏を披露
ドイツ館など地球博を見学。犬山明治村でドイツ団歓迎レセプション(会長参加)

4月29日～5月31日「ドイツこどもの絵本展」

「さぬきこどもの国」(高松市香南町 高松空港隣接)で開催

ボン日独協会との姉妹提携10周年を記念してボン日独協会から寄贈を受けた絵本
220冊を展示、手に取って開いて見ることができ親子連れが多勢来館した



5月16日(月) 経済同友会例会にドイツの絵本20冊を展示

5月25日(水) ドイツの台所から「ドイツ家庭料理の実習」

ヨンデンプラザ・サポート料理教室 ドイツ女性2人によるドイツ料理講習会

5月25(水)、26日(木) ドイツってどんな国? 「あるドイツの一日」

ヨンデンプラザ・サポートギャラリーにて

デュッセルドルフで教室を持つ Hasenbeck さんがドイツ工芸トールペインティングを
手をとって教えた。また、ドイツの日常生活のパネル展示は小学生に人気だった
ドイツ人女性4人は渡部恵子宅、国方秀昭宅にHS



「日本におけるドイツ年」

本場の味 できた 高松で家庭料理教室

ドイツ人講師によるドイツ料理教室が二十五日、高松市サンポートのヨンデンプラザで開かれ、主婦ら十六人が本



ドイツ人が「本場の味」を教えたドイツ料理教室

場の味「づくりに挑戦した。メニューは牛肉やジャガイモを煮込んだ「グー

ラッシュ」パンに牛乳やタマネギを加えて団子状にした「クヌーデル」などドイツの伝統的な家庭

料理。ドイツ・バイエルン地方出身のスザンネ・レアピンガーさんが片言の日本語に身ぶり手ぶりを交えながら指導した。

国分寺町の水谷好子さんは「ドイツ料理にはあまりなじみがなかったが、気軽に作れると分かった。家でもやってみたい」と話していた。今年は「日本におけるドイツ年」に当たることから、香川日独協会が企画した。

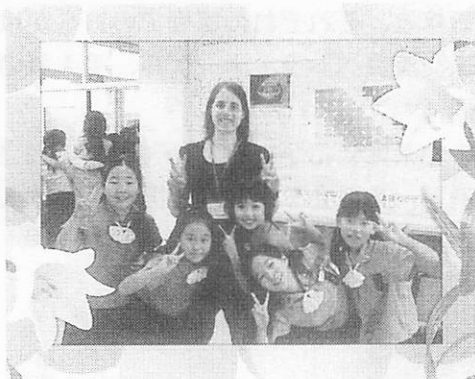
(『山陽新聞』 2005年5月27日)



ボン大学研究生
Maria Theissen

ようこそ! マリアさん

2005年9月



香川大学教育学部附属高松小学校

協力：香川日独協会

6月6日(月)～14日(火) ボン独日協会HS交流

内田禮子、松島明子会員が参加(写生旅行)

安価なホテルに投宿し 野外写生の目的地への送り迎えをボン協会員に協力いただく。

本来のHSとは異なりHVの形式をとりボン協会員の家庭を短時間訪問した。

6月12日(日) 平成17年度香川日独協会総会・ホテルクレメント高松

6月13日(月) ドイツ ECOS 社所長メームケン夫妻が秋の環境展開催挨拶のため香川県庁国際課を表敬訪問(会長同席)

7月14日(木)「日本におけるドイツ年」行事についての打ち合わせ(東京)

15日(金) ぐんま日独協会のドイツ展を見学: ぐんま県庁(それぞれ会長出席)

7月22日～24日(9:00～18:00) ドイツ観光ポスター展「ドイツ大好き」Ⅰ部

まなびらんど丸亀市生涯学習センター1Fギャラリー、秋寅の館 の2個所

ドイツ各地の写真ポスターパネル80枚を展示、ガイドブック、地図を提供する。

7月26日～31日(10:00～18:00) ドイツ観光ポスター展「ドイツ大好き」Ⅱ部

ヨンデンプラザ・高松ギャラリー 高松市丸亀町 同上



8月20日～9月10日 ドイツ研修学生3名のインターンシップとホームステイ実施

ドイツ研修学生受入先: 四国電力、香川県国際課、丸亀市国際交流協会

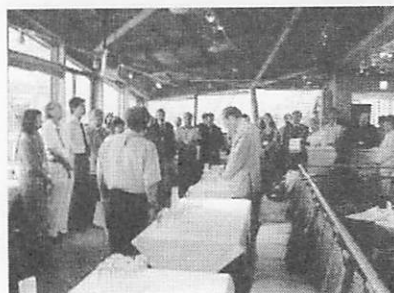
8月20日(土) 3人のドイツ研修学生17:30高松空港着。出迎え。

3人のドイツ研修学生は3週間にわたる研修と、それぞれの家庭でのHSがはじまる。

9月3日(土) 研修学生3名とアイパル国際交流員ペトラ・ナーゲル、受入れの家族たちが鳴門ドイツ館「板東俘虜収容所」を訪問

9月4日(日) 協会員福山福子宅(丸亀)のお茶席に招かれる。(研修生たちと協会員)

9月9日(土) 研修学生3名の送別会と恒例ビールの会をあわせて開催。受け入れ家族と研修生、香川日独協会会員との懇親の会。真鍋知事出席。



- 9月10日(日) ドイツ研修学生3名が帰国 7:35 高松空港発
- 10月2日(日) 理事会 アイパル香川にて
- 10月30日(日) かがわ国際交流フェスタに参加
- 10月30日(日)～11月8日(火) サッカー「世界の共通語」展
アイパル香川1Fギャラリー 70×110 パネル54枚の展示
- 11月15日～25日(8:30～17:00)「ドイツの環境保全展」香川県庁ギャラリー
ー地球の未来を次世代に伝えるためにー (ドイツ ECOS 社)
ポスター25枚と機器6個の展示、ドイツの環境保護に関する企画展
- 11月14日(月) ドイツ公使歓迎会・高松市内
- 11月15日(火) 講演会「ドイツの環境政策について」香川県庁ホール
講師：ドイツ大使館公使 シュテファン・ガロン氏



- 12月23日(金) 詫間ドリアンクラブ 留学生の餅つき大会
- 12月20日(火)～25日(日) ドイツの絵本の展示 さぬき市志度図書館
- 12月24日(日) ドイツの絵本の読み聞かせ会：ペトラ・ナーゲル(志度図書館)

平成18年(2006年)

- 1月29日(日) 理事会・高松市内(8名出席)
- 2月19日(日)「春をよぶ会」リーガゼストホテル・高松にて

【表紙】

パイロイト祝祭劇場

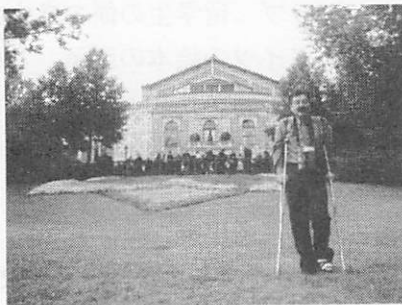
ワーグナーの聖地パイロイトで毎夏開催されるパイロイト音楽祭に2006年8月、17年ぶりに訪れることができた。落ち着いた町並みは、ほとんど変わっていないように思われた。中央駅の内装やホームは新しくなっていたが、駅までの路線は相変わらず単線が無電化のままである。

今回鑑賞できたのは《さまよえるオランダ人》《トリスタンとイゾルデ》《パルジファル》の3演目だけだったが、祝祭劇場内に鳴り響く音楽と演奏はさすがに素晴らしかった。それに比べ、聴衆をあえて感動させまいとするかのような最近の演出傾向には、いささか閉口させられた。特に醜悪だったのは《パルジファル》。聖杯伝説に基づいて舞台神聖祭典劇として作曲された美しく荘重な作品のはずなのだが、今回の舞台では、まるで原始宗教祭典劇といった趣き。



(http://www.schlingensief.com/projekt_eng.php?id=t044)

聖杯は舞台には登場せず、この写真のような太った女性が聖餐式の中心人物として登場。儀式の最後では、参集者が赤い血のような液体のついた手を順番にパルジファルの白い服でふいていくので、パルジファルの白衣には赤い手の跡がいっぱい。この女性も含め、総じてオペラの台本にはない人物が勝手にたくさん登場し、ストーリーとは無関係に回り舞台を利用してあちこち動き回る。第3幕の聖金曜日の音楽の場面も、本来なら登場しない人物が何人も出てきて、やたらと動き回り、崇高な音楽に浸る気分も台無し。演出家シュリンゲンジーフは映画監督であるらしく、紗幕にはこれもオペラとは無関係のウサギなどの陳腐な映像が頻繁に流される。ラストシーンの処理まで映像ではちょっとねえ、ということで、共感を感じない演出ではあったが、それでも、実際に生で最近の傾向を体験できたということは、いい勉強だったといえるのであろう。

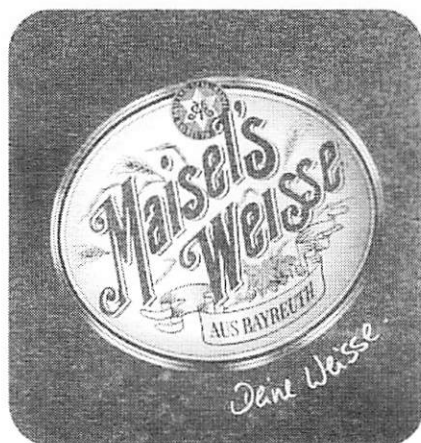


ところで今回、実は7月下旬に不注意で骨折してしまい、ギブスをして松葉杖をつきながらのバイロイト訪問となった。今年の8月のドイツは冷夏で、空調のない劇場内が40度近くなることもなく、快適に過ごすことができたのは幸いだった。宿泊はインターネットで探して手配した1泊24ユーロのガストホーフ(Gasthof)。1階が飲食店になっていて、2階に部屋があるというタイプの宿屋。昼間はあまり外出もできなかったのも、バイロイト滞在の4日間、昼のランチは毎日ここで食べたし、この店の家族的雰囲気は大いにありがたかった。もちろん、ビールも大量に飲んだ。ちなみに、バイロイトのビールでは「マイゼルス・ヴァイセ」が有名である。

マイゼルス・ヴァイセ (5.7%) Maisel's Weisse

バイエルン北部のバイロイトでつくられる精妙な小麦ビール。ふくよかで香ばしく、品のよいヴァニラアイスの風味をほのかに残して消えてゆく。飽きがこず、いくらでも飲めそうなビールである。バイロイトは毎年夏にワーグナーの作品を上演するバイロイト音楽祭が開かれるところだ。居眠りしながら《神々の黄昏》を聞き終わって飲むこのビールの味は、また格別に違いない。

(渡辺純『ビール大全』 文春新書)



香川日独協会会報 第13号

2006年10月発行

発行：香川日独協会事務局
Japanisch-Deutsche Gesellschaft KAGAWA
〒760-0017 香川県高松市番町 4-4-20
Tel: 087-861-6820
発行責任者：中村 敏子（会長）
編集：最上 英明
印刷：（株）万成社